知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

# COCONUTS CLUB

JANUARY 2018 1

プレイランド・ミステリー・ツアー

# プレイランド・ミステリー・ツアー

今回は、遊び場や公園に隠されたいろんな謎を探りに知多半島を一周してみたい。
思い出の場所や馴染み深い施設も、知られざる歴史を知ればもっと親しみが沸いてくるかも。
いつもとはちょっと違ったツアーへ、いざ！

ツアー#01 ―武豊―

## オクトパス・アンド・トレイン

武豊には巨大な蛸がいる。

と言っても海中に棲んでいるわけではない。その蛸がいる場所は、海岸線から一キロほど離れた内陸部にある長尾児童遊園。武豊町立図書館と県道467号半田環状線に挟まれた場所にあるごく普通の公園で、敷地内には「長尾児童館」があり、外遊びも中遊びもできるのが特徴だ。

その長尾児童館の建物と正面から対峙するように、巨大な蛸が太い足を伸ばしてデンと居座っている。地面からつるつる頭のてっぺんまでは高さ約四メートル。端から端までは約七メートル。のどかな公園の中でその存在感は圧倒的だ。ユーモラスと表現してもいいのだが、大きな顔に目鼻がないのでいささか不気味でもある。

蛸の像と言えば、日間賀島の東港と西港にある大きな歓迎モニュメントが知られているが、こちらはその十数倍の大きさで、モニュメントではなく遊具である。正式には「タコの山」といい、足や口が滑り台になっている。昭和五十六年、公園の完成と同時に設置され、誕生からすでに三十五年を超えている。遊具としてはかなりの古株だが、今も子〻供たちが楽しく遊ぶ姿が見られる。親子二世代で遊んだ経験のある町民も多いことだろう。

一帯は武豊町が公共施設の集積地として昭和五十年代から六十年代にかけて開いた場所で、長尾児童館・児童遊園と並んで図書館、中央公民館、歴史民俗資料館、グラウンドが横に連なっている。昭和五十一年に中央公民館が開館したのを皮切りに、五十五年に児童館、翌年に児童遊園、六十年に資料館、六十一年に図書館と相次いでオープンした。

児童遊園の完成時には、タコの山やブランコ、鉄棒以外にもさまざまな木製遊具が設置され、ミニ・アスレチックパークの様相を呈していたという。将来の武豊を担う子供たちが生き生きと遊ぶのにふさわしいものを、と当時の担当者たちが考えて、これらの遊具が選ばれたのだろう。開園時にはまだ、アサリ池に浮かぶ水上宮殿風の図書館はなく、あたりは田んぼが残るいささか寂しい場所だった。そんな中に出現した巨大な蛸は、子供たちに強烈なインパクトを与えたに違いない。

手掛けた業者の記録は残っていないようだが、東京の前田環境美術株式会社（旧名は前田屋外美術株式会社）という遊具の専門メーカーが同じような形の「タコの山」を昭和四十年代から〻全国の公園に建設しており、おそらくこれも同社の手によるものと思われる。全国に四百ほどあるとされ、知多半島ではほかに常滑市新浜町の新浜西公園や半田市瑞穂町のみなと公園などにもある。

この公園ではタコの山のほかに、児童館の横に置かれた見慣れないデザインの電車も目を引く（表紙写真）。案内板が設置されていないので知らない人にはどこを走っていた電車なのかわからないと思うが、実はこれは、かつて武豊町内に通じていた日本油脂株式会社（現日油株式会社）の専用線で従業員輸送に使われていたもの。二両編成で運行され、昭和六十一年に専用線が廃止されたのち、町に寄贈された一両だ（もう一両が東大高児童館にあったが平成二十四年に老朽化のため解体・撤去）。改装して児童館附属の部屋として活用しており、おもちゃ修理や読み聞かせのボランティアグループが利用している。

タコの山と同時に設置された遊具のひとつ「丸太峠」。このほか、ユラユラ通りコンビネーション、丸太登り縄ばしご、うなぎのねどこなどがあり、隣接するアサリ池にはターザンロープも設けられていた。（写真提供：武豊町子育て支援課）

開園当時の長尾児童遊園。手前にみえる田んぼには現在、県道467号の築堤が通っている。

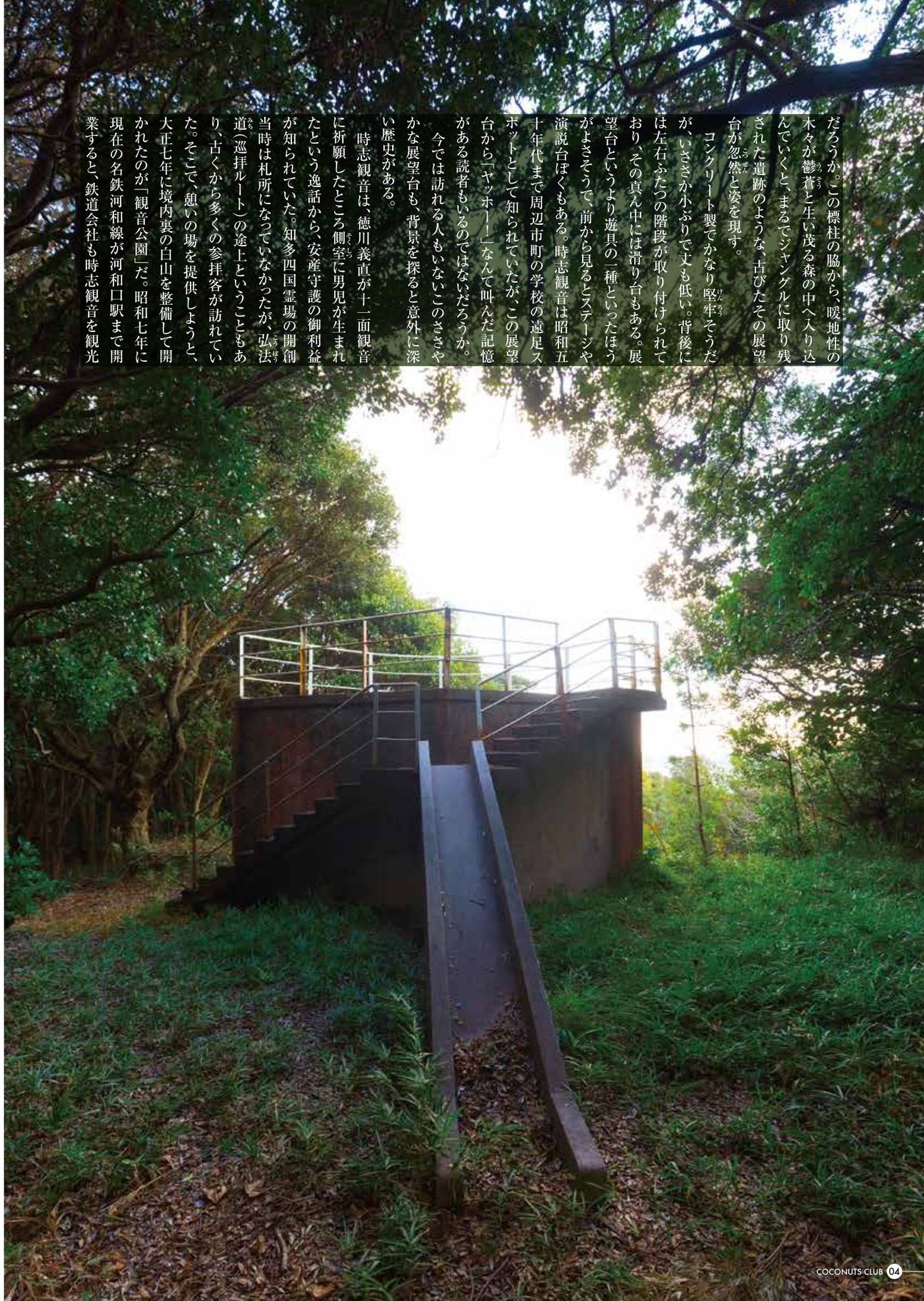
ツアー#02 ―美浜―

## カンノン・フォレストパーク

美浜町には忘れ去られた展望台がある。

それがあるのは時志の影現寺。一般的には「時志観音」の名で通り、知多四国霊場の番外札所、南知多三十三観音の第一番札所になっている曹洞宗寺院だ。平安時代中期の天長四年（八二七）に漁師が海から引き上げた十一面観音を祀ったことが起源とされ、江戸時代には尾張藩の初代藩主徳川義直が崇敬したことでも知られる。寺は三河湾に面した高台にあり、国道247号から続く百二十八段の階段を登り切って振り返れば、眼下に波穏やかな三河湾が広がる。眺望のよさは知多半島の寺院随一と言っていいだろう。

本堂の隣に立つ大きな聖観音像の先に、「観音公園」と刻まれた標柱がひっそり立っているのに気付く参拝者はいる



だろうか。この標柱の脇から、暖地性の木々が鬱蒼と生い茂る森の中へ入り込んでいくと、まるでジャングルに取り残された遺跡のような、古びたその展望台が忽然と姿を現す。

コンクリート製でかなり堅牢そうだが、いささか小ぶりで丈も低い。背後には左右ふたつの階段が取り付けられており、その真ん中には滑り台もある。展望台というより遊具の一種といったほうがよさそうで、前から見るとステージや演説台ぽくもある。時志観音は昭和五十年代まで周辺市町の学校の遠足スポットとして知られていたが、この展望台から「ヤッホー!」なんて叫んだ記憶がある読者もいるのではないだろうか。

今では訪れる人もいないこのささやかな展望台も、背景を探ると意外に深い歴史がある。

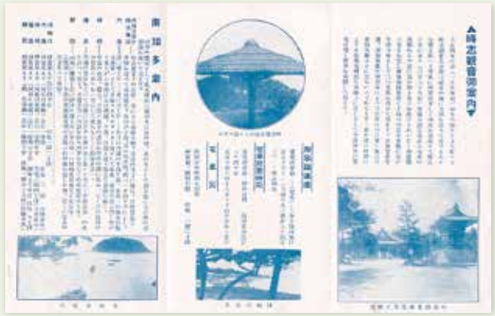
時志観音は、徳川義直が十一面観音に祈願したところ側室に男児が生まれたという逸話から、安産守護の御利益が知られていた。知多四国霊場の開創当時は札所になっていなかったが、弘法道(巡拝ルート)の途上ということもあり、古くから多くの参拝客が訪れていた。そこで、憩いの場を提供しようと、大正七年に境内裏の白山を整備して開かれたのが「観音公園」だ。昭和七年に現在の名鉄河和線が河和口駅まで開業すると、鉄道会社も時志観音を観光名所のひとつとして盛んにPRするようになった。

その少し後、時志観音がさらに脚光を浴びる出来事があった。

昭和十年の初夏、奈良県にある信貴山朝護孫子寺に祀られている毘沙門天が住職の夢枕に立った。この寺は聖徳太子手彫りの毘沙門天像を安置する古刹で、とりわけ関西の人々の信仰が篤い。縁を感じた住職が信貴山に申し出たところ先方も感じ入り、毘沙門天の御分身像や厨子を授け「信貴山名古屋別院」を名乗る許可を与えた。

この経緯を聞いたのが、住職と親交のあった名古屋鉄道社長の藍川清成だ。名古屋政財界の有力者である藍川は「この毘沙門天を大都市名古屋の守護神としてお祀りしよう」と決意。自ら信徒総代となって多額の寄付をしただけでなく、名古屋の実業家たちに喜捨を呼びかける。そうして集まった浄財で毘沙門天を祀る本殿を建設、翌十一年の春にはその落慶法要と毘沙門天の入仏式が盛大に執り行われた。藍川社長の肝煎りでバックアップした名鉄も、前年夏に河和駅まで延長開業していた河和線に時志駅を開設し、南知多・聚楽園大仏・新舞子と並ぶ知多半島の代表的名所として大々的に宣伝した。

威容を誇った信貴山の本殿は、残念ながら昭和十九年の東南海地震で倒壊してしまい、以後、再建されることはなかった。しかし戦後も変わらず参拝者は多く、名鉄との縁も続く。昭和二十年代末には十一面観音の御開帳が行われ、これを記念して名鉄が建造したのがこの展望台なのである。



昭和10年頃の時志観音のパンフレット。十一面観音の御開帳に際して愛知電鉄が発行したもの。(提供:影現寺)

ツアー#03 | 南知多 |

## プール・イン・ザ・シー

むかし、羽豆岬にはプールがあった。

風光明媚な名所にプールとは意外に思うかもしれないが、その遺構は今も残っている。場所は羽豆岬の西側。海にせり出した防波堤で区切られた、タテ約五十メートル、ヨコ約三十メートルの区画がそれだ。その中には四十メートル弱のプールと浅いプールがある。コンクリートブロック造りの更衣室やシャワー・腰洗い槽などの設備もそのままで、海側には海水を引き入れるのに使ったバルブも残っている。

このプールは、正式名称を「師崎水浴場」という。観光施設ではなく、昭和四十八年から平成九年まで主に師崎小学校が授業や夏休みのプール開放日に使用していた。防波堤に囲まれているとはいえ爽快な環境で、実に海の町らしい。しかし、ここから小学校まではおよそ一キロもあり、授業のたびにわざわざ歩いて来るのは大変そうでもある。実際、当時の師崎小では水泳の授業は通常の二時限分を要していたという。さすがに不便なので、平成十一年に学校の敷地内にプールが建設され、以後、師崎水浴場は使われなくなった。

では、師崎水浴場ができる昭和四十八年以前は、小学校の水泳の授業はどこで行っていたのか。地元の人に聞いてみると、師崎水浴場の北に前身のプールがあり、そこで泳いでいたという(つまり、現在の小学校のプールは三代目ということになる)。場所は、羽豆神社の北側の登り口のすぐ前。現在は歩道と防波堤の整備によってプールの痕跡もほとんど分からないが、海をよく見てみると、プールの縁のごく一部分が波に飲まれそうになりながら残っている。

その師崎の「初代」プールが作られたのは、なんと戦前の昭和五年というから驚きだ。おそらく知多半島ではもっとも古いプールのひとつだろう。

これを手掛けたのは、師崎で土建業を営んでいた鈴木兵松という人。慶応二年(一八六六)生まれの兵松氏は、師崎の鈴木建築の鈴木松三さんの祖父にあ

たる。鈴木さんによれば、兵松氏がこのあたりの埋め立て工事を請け負った際に、自分の地所に自費で建造したという。当時は羽豆岬の東側に待合浦海水浴場があったものの、岩場が多くて急に深くなる場所もあり、子供の泳ぎ場としては決して安全ではなかった。そこで兵松氏は、子供たちのために安全な泳ぎ場を提供しようと考えたのだろう。

本誌昨年九月号の特集「岬の名を聞けば」で羽豆岬の思い出を語ってくれた昭和六年生まれの中川啓二朗さんの記憶では、戦前は主に低学年の子が利用し、高学年の子は待合浦のほうで泳ぐのが常だったという。学校の授業で盛んに使われるようになったのは戦後からのようだ。毎夏のプール開きは盛大に行われ、プールに浮かべたスイカやウリをヨーイドンで泳いで取りに行くというようなアトラクションが行われたとか。また、鈴木さんによれば、戦前のベルリンオリンピックで日本人女性初の金メダリストになった前畑秀子が、何回かプール開きの日に来訪したとか。

初代プールは、四十三年もの長きにわたり師崎の子供たちに親しまれた。しかし長年の風波で老朽化し、また、衛生面や安全面への配慮もあって、二代目となる師崎水浴場にバトンを受け渡すことになった。

「初代」の師崎プール。プール開きの様子だろうか。「二代目」の師崎水浴場に比べると防波堤がかなり低いことがわかる。また、天然の岩場がプールサイドの一部になっていた。（写真提供：宝乗院）

ツアー#04 ―常滑―

## キャッスル・オン・ザ・ヒル

常滑南部の山の上には知られざる城がある。

その城は、大野城跡展望台のような疑似天守閣ではなく、西洋風の建造物である。地元では「クッパ城」と呼ばれているとかいないとか…。

それがあるのは武豊町と境界を接する檜原地区にある桧原公園。集落の北にある低い山の一帯を、地形や植生を活かして整備した自然公園だ。面積は十五・七ヘクタールあり、山の中に散策路が巡らされている。手軽に自然を楽しむにはもってこいの環境で、園内では散歩やバードウォッチングに訪れた人の姿をよく見かける。

城があるのは標高約八十メートルの公園最高地点のすぐ下あたり。東と西、二か所の駐車場から伸びる道を登ればわずか十数分で辿り着くことができる。木立の中に現れるのは二つの塔。四階建ての小ビルくらいの高さで、ひとつは太く、もうひとつは細い。外壁はレンガ風で、その形は城というより「見張り塔」と言ったほうが正確だ。

細いほうの塔の内部には螺旋状の階段があり、本当に見張り塔のごとし。ぐるぐると最上階へ登れば、半円にくり抜かれた窓の向こうに風景が見える。しかし、展望フロアはここだけではない。隣にある太いほうの塔と通路で結ばれており、その屋上からも眺望が楽しめるようになっているのだ。伊勢湾、セントレア、鈴鹿山脈、常滑の町、知多から四日市にかけての工業地帯、三河の山々、武豊の町と工場群、そして半島の中央に横たわる緑豊かな山並み。ほぼ三六〇度の大パノラマ！。本誌二〇一六年四月号「絶景礼賛」で紹介したように知多半島に展望台は非常に多いが、全方向に視界が効くスポットはここがほぼ唯一と言っていい。

ただし、これは単なる展望台ではない。太い塔には重要な機能が備わっている。実はこの塔、本来の役割は配水施設なのである。正式名称は「桧原配水池」で、水道課の管理する施設だ。

水の流れをざっと説明すると次のようになる。まず、水を長良川河口堰の取水口で取り入れる。この水は、弥富市などにあるポンプを使い、導水管を通って知多市佐布里にある愛知県の施設「知多浄水場」へ送る。ここで水をきれいな水道水にしてから、半島の各市町が管理する配水場へ送り、そこから各家庭や事業所などに水が送られる。常滑市の南部一帯でそれを担うのは西阿野にある「熊野配水場」なのだが、檜原地区は標高がやや高いため、いったん桧原公

園の西駐車場の一角にある「桧原ポンプ場」の受水槽に送り、そのポンプで山上の「桧原配水池」に汲み上げて、各家庭に水を送っているのである。

そんな配水施設の上に展望台があるわけだが、完成に至るまでにはこんな話があった。

もともと桧原公園のあった場所は、ごくありふれた里山だった。ここに公園を整備する話が持ち上がったのは昭和四十年代の初頭。なんと五十年も昔の話だ。しかも当初は、陶芸作家たちの工房を集めた「陶芸村」を建設しようという構想だった。

事業のスタートは昭和四十七年。しかし、市街地から離れて不便なことからなかなか話がまとまらない。そうこうするうちに関係者の間では、常滑市全域が陶芸村であるとする考え方が大勢を占めるようになり、一度白紙に。その後、計画が変更され、県と市が共同で環境保全林として整備を進め、昭和五十八年に「桧原公園」として一部が開園、昭和六十二年にグランドオープンとなった。

配水施設兼展望台ができたのは平成六年。公園内ということで遊び心のあるデザインにして、来園者に楽しんでもらおうというアイデアだったようだ。まず展望台として先行使用し、配水施設が稼働するのは平成十年であった。

参考文献◎決定版地図ガイド 知多四国巡礼（歴遊舎）／知多半島の昭和（樹林舎）／武豊町誌／南知多師崎誌／中日新聞知多版記事、昭和56年9月19日付
取材協力◎鈴木松三さん／中川啓二朗さん／慈雲山影現寺／宝珠山宝乗院／南知多町立師崎小学校／武豊町子育て支援課／南知多町企画課／南知多町産業振興課／常滑市水道課／常滑市都市計画課